
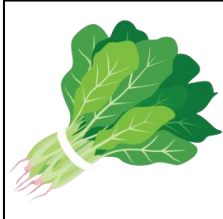


まきどき・植えどき・収穫どき
どきどき情報 12月

～12月の野菜・花きの管理～

種まき	栽培のポイント
<p>野菜</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コマツナ ・ホウレンソウ ・二十日ダイコン ・セロリ（ハウス 3月下旬～4月上旬定植） <p>など</p> <p>花き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シンテッポウユリ <p>など</p>	<div style="display: flex; flex-direction: column;"> <div style="margin-bottom: 20px;">  <p>○アスパラガスの病害対策 茎枯病などの病害対策のためには、伝染源を残さないことが基本です。地上部刈取り後の茎（特に羅病した茎）はできるだけほ場外へ持ち出しましょう。また、伝染源として残りやすい収穫後の残茎の抜き取りも行いましょう。バーナーで地表面を焼却するとさらに効果的です。この際、地表面が炭化するまで時間をかけて行いましょう。</p> </div> <div style="margin-bottom: 20px;">  <p>○寒締めホウレンソウ 気温が5℃以下になると縮み始めるので、ホウレンソウが収穫できる大きさになったら、ハウスを開けて低温にさらします。寒さに慣れるまでは、ハウスを開けるのは日中のみにしてください。風が強いときや、最低気温が-5℃以下になる場合は要注意です。ハウスを開けて2週間ほど寒さに当てると品質が良くなります。茎をかじってみて甘さを感じるようになれば収穫適期です。</p> </div> <div> <p>○余った種子の保管方法 種子は生きて呼吸をしているので、常温に置いたままですと新鮮さを失い、発芽できなくなってしまいます。保存の仕方によっては寿命を延ばすことができるので、余った種子はしっかり保管しましょう。</p> <p>保存のポイントは光、湿気、酸素です。種袋から空気を抜くようにして、切り口を折り畳み、しっかりと口を閉じてセロハンテープを張って零れ落ちないようにします。その後ジッパー付きのポリ袋に入れ、冷蔵庫に保管します。乾燥剤を中に入れるのもよいでしょう。ただし、ニンジンやタマネギは年越しをすると発芽が悪くなりますので、新しい種子に更新しましょう。</p> </div> </div>

○土づくりの季節です！

ほ場の土（作土）は農業にとって最も大切な生産設備です。品質の高い農産物を効率的に安定して栽培するためには、日常的な管理とともに、定期的な点検や補修が必要です。この定期的な点検・補修が土づくりです。

○土づくりの点検項目

土づくりの点検項目は下記のように大きく3つに分かれます。

- ・物理性（水もちや通気性など）
- ・化学性（pH、養分バランスなど）
- ・生物性（生物の多様性、量など）

物理性の改善については、堆肥などの有機物の施用が有効です。一方、化学性については、実際に調べてみないと分からないものが多くあります。ですから、数年に1度でもよいので、定期的に土壌診断をしましょう。

生物性については、最近になってその生息量を測定する技術が出てきたものの、微生物の種類があまりに膨大なため、数値的に見るのは難しい現状にあります。ただし、有機物を定期的に施用することで、その生物相が豊かになるので、連作障害を防ぐためにも、生物性は重要なポイントです。

表1：土壌診断を健康診断に例えると（日本土壌協会資料より）




土壌診断	健康診断
塩基置換容量（CEC）	胃袋の大きさ
塩基飽和度（%）	満腹度合
pH	体温
EC	血圧
有効態リン酸（P）	年齢
有効態窒素（N）	栄養成分量

○あさつゆ農薬・病害虫防除講座～第 1、2 回のおさらい～

○効率的な害虫防除のために ～害虫の生態に基づく予察と防除～（第 1 回）

・害虫防除の目的…むやみに殺虫剤を散布するのではなく、害虫の生態に合わせた防除を行うことが重要。

表 1：果菜類やアブラナ科葉菜類の主要な害虫

主要な害虫	生態	対処法
アブラムシ コナジラミ 	害虫が排泄する糖分がすす病などの原因となる。 吸汁する口からウイルスを伝染させる。	数が少なければ大きな問題になることはない。
コナガ 	幼虫 1 匹が生涯に食べる葉の面積は 1 cm ² 。 目だった食害痕が見られるときには既に殺虫剤が効きにくい大きさまで育っている。	予察情報を確認しながら、発生初期に防除することが重要。
オオタバコガ 	幼虫が果実や茎を食害。果実の場合、種子を食べつくすと隣の果実へと移っていく。 1 年で 3 回ほど代替わりする。第 2～3 世代（8～10 月）に被害が拡大する。	1 頭の幼虫が多数の果実を食害するため、早期の防除が重要。 卵から孵って果実などに食入するまでが防除のタイミング。

・適期防除が重要

→多発状態になってから薬剤を散布しても全ての害虫を殺すことはできない（老齢幼虫は殺虫剤が効かないことが多い）。初発段階で散布することで、幼虫が生長する前に防除することができる。**ほ場での観察や、予察情報をよく確認すること。**

・農薬散布だけが害虫防除ではない

- レピガード（LED の光を用いた防除器）はオオタバコガの産卵を抑制する。
- シルバーストライプマルチなどの光反射資材によって、アブラムシやアザミウマ等の侵入を防止できる。
- 粘着トラップ（黄色や青色）はアブラムシやコナジラミ、アザミウマ等の微小害虫を誘引する効果がある。肥料袋等に粘着スプレーを吹き付けることで、安価で利用することができ、また**予察にも使える。**
- これらは完璧に害虫を防除できるわけではないが、害虫の発生密度を下げる効果がある。殺虫剤と組み合わせることで、**散布回数を減らすことができる。**

○殺虫剤の種類とその特性に応じた使用（第 2 回）

表 2：主要な殺虫剤のグループとその特徴

グループ	特徴	主な殺虫剤（商品名）
有機リン系	様々な害虫に効果があるが、抵抗性が発達しやすい。	オルトラン、スミチオン、マラソン
カーバメート系	アルカリ条件下では効果がない。	オンコル、ランネート
ネライストキシン系	中毒症状から致死までの期間は長いが、摂食行動は速やかに停止するので、被害は最小限に抑えられる。	パダン
ネオニコチノイド系	浸透移行性、残効性が高い。	アドマイヤー、ベストガード、モスピラン
ピレスロイド系	様々な害虫に効果があり、即効性。	アグロスリン、アディオオン
マクロライド系	様々な害虫に効果があり、即効性。	アニキ、アフアーム
IGR 系（昆虫成長制御剤）	幼虫の脱皮を阻害することで効果を発揮する。遅効性だが適期処理により長期残効性が得られる。	マッチ、カスケード、ファルコン
ジアミド系	比較的新しく発見されたグループで、チョウ目害虫に対して高い効果がある。即効性。	フェニックス、プレバソン
BT 系	生物農薬なので有機 JAS 野菜にも使える。チョウ目害虫に対して有効。	エスマルク、ゼンターリ、トアロー

○抵抗性を発達させないためにも、**同じグループの殺虫剤を連続して使用することは避ける。**例えば、ネオニコチノイド系のアドマイヤー、ベストガードを連続して使用しない。

あさつゆ連絡

電話番号：0268-41-1062
FAX：0268-41-1063

技術事項作成協力

上小農業改良普及センター（岡崎）
電話番号：0268-25-7156（直通） FAX：0268-23-2161